## 二、戦争は悪である。現代戦争は最大の極悪である

戦争の本質を考える前に、その定義をしておく必要があろう。広狭さまざまな定義が可能だが、細かい議論は省略して、一応常識的に次のような規定しておこう。戦争とは、「政治的構成体（主として国家）が、何らかの政治的目的を達成するために、物理的力（主に武器）をもって対立集団と抗争し、自らの意思を相手方に強要する手段として、意図的かつ組織的に殺傷を行なう行為」である。〔この定義によれば、国家の外にも、民族や部族等でも政治的に構成され、意思決定能力と武器を持つ集団は、戦争主体となりうる。従って、政治的構成体でないヤクザ・暴力団等の武力抗争は、これに入らないが、右の条件を充たした内戦は戦争というべきことになる。〕

さて、このような戦争は、人間にとってどういう意味を持つか。端的に結論をいえば、それは倫理的にはまぎれもない「悪」の行為である。古今東西どの社会でも、〃人殺し〃は道徳上最も重い罪として非難されてきた。法的にもふつう、〃急迫不正の侵害〃に対処する〃正当防衛〃や緊急避難など非難可能性のない場合を除いて、最も重い可罰対象とされてきた。生命が尊貴だとすれば、〃殺す勿れ〃は法・道徳の第一命題となる。かつて日本の最高裁判所は、ある判決で〃人の生命は地球よりも重い〃という、いささかオーバーな表現で人命の尊さを強調した。その言葉を借りれば、何千何万個の地球を吹き飛ばすような〃殺人〃を意図的・組織的にかつ大量に行なう現代戦争は、超巨大な「悪」という外ない。

然り。戦争は悪である。〃人殺し〃が道徳上普遍的に禁じられる「悪」である以上、戦争はどのように正当化される場合でも、巨大な悪である。とくに大量破壊兵器を用いて、罪なき人びとをも大量に殺傷する現代の戦争は、道徳的に許しえない〃極悪〃である。あらゆる戦争論は、人間の生き方にとって重要な、この基本認識から出発しなければならない。

ただ、ここで触れておくべき問題が二つある。その一つは、ヨーロッパを中心とした死刑廃止運動との思想的関連である。死刑廃止論の根拠もいろいろあるが、その中心の骨子は、人命の貴重さと良心の回復可能性を前提として、次のように要約できるだろう。すなわち、〃極悪人といえども、国家がその生命を奪う権限はない。死刑という極刑の代わりに、犯罪者に改悛の機会を与える方が、人権にとっても社会防衛の見地からしても、はるかに有意義ではないか〃と。――個人の人格と人権を重んじ、重大な犯罪人にも人道的処遇を与えようとするこの理想主義的な主張は、尊敬に値する。しかし同じ地上で、何の罪もない多くの人びとが、戦争という国家の行為によって虫けらのように殺されている情況は、死刑廃止に情熱を傾けている人びとにどう映っているのか。もし〃次元が違う問題だ〃として、戦争を認めたり、何の関心も持たないとすれば、それは遁辞か自己欺瞞であろう。重い罪を犯した者に一掬の涙を注ぐならば、罪もなく幸せに生きたいと願っている無数の人びとが、戦争によって理不尽に殺傷されている現実に対して、何百倍何千倍もの熱情とエネルギーを傾けて、〃殺すな〃と叫ぶべきではないだろうか。ところがヨーロッパ諸国は、死刑廃止をECの加盟条件として、文明の高さを誇示しながら、他面で戦争の廃棄をめざす志を持つ気配はまったくない。（それどころか、戦争の要因にもなる武器輸出をさかんに行なっている国も多い。）このギャップは大きい。その矛盾を反省する声も、聞こえない。あえていえば、戦争を認めながら死刑の廃止を説くEC諸国は、人道主義の論旨の不徹底にとどまっているのか、〃戦争はやめられない〃という「現実」に妥協しているのか、回答を求められるだろう。〔それに答えられなければ、ECの死刑廃止論の半ばは、虚妄か、偽善か、あるいは自己欺瞞かという、厳しい疑問にさらされることにもなりかねない。〕